ウトロチャシコツ下遺跡における「貼付紋系土器」編年の再検討（前篇）
―未公表資料を中心として―

柳澤清一

はじめに

北方編年体系の隠れた疑問点を指摘し、今では「忘失」された山内博士と佐藤達夫の学説（山内 1964・佐藤 1972）が基本的に妥当である、すなわち「逆転編年」説が成立するという仮説を発表したのは、今から15年前のことであった（柳澤 1999a・b）。この「覆水を盆に帰す」新説の提案において、筆者が最も重要視したのは、河野広道が1955年に『斜里町史』（第1編　先史時代史，1955）の中で初めて発表した、ウトロチャシコツ下遺跡（斜里町）の層位事実とその出土資料であった。それによると「革紐状」の貼付紋を持つ「トビニタイ土器群Ⅱ」相当の土器が、ソーメン紋土器よりも下層の竪穴住居址から検出されたと記述されている。これは明らかに通説とは逆転した層序を示すものであり、疑う余地のない「史実」が確認されていると判断された。

通説に反したこのような層位事実は、河野が調査した同じ斜里町内の禅龍寺遺跡でも[1)]、そして遥か礼文島の上泊遺跡においても、先学によって夙に確認されていた（新岡 1950、柳澤 2006a：104-112、2008c：161-167）。したがって山内清男と佐藤達夫の北方編年説（山内 1964・佐藤 1972）の妥当性を示唆する層位事実が、なぜ広域的な広がりを以て存在するのか。その事情について、全道的な観点からの組織的な再検討が求められると考えられた。

このように学史上に「忘失」された出土事実をふまえて、通説の編年体系を根本から見直すという目標を掲げ、これまで15余年に亘って研究と調査を進めてきた。本稿では、1964年における学説対立の隠れた原点である、知床半島のウトロチャシコツ下遺跡に戻り、未公表の貴重な土器群を用いて、通説の道東編年が不成立であることを、層位と型式の両面から改めて明確にしたい。

なお、この作業と係わりのある新稿三篇をすでに投稿し[2)]、また一篇を執筆中である。小論ではそれらの議論もふまえて、諸氏の通説的な道東編年案についても、少しく検討したいと思う。

1．問題点の所在

通説の道東編年を支える考古学上の根拠とされるものは、どれくらい存在するであろうか。それらの優先順位は当然に異なるであろうが、主要なものとしては、つぎのような調査事例が挙げられる。

a．ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）における擦紋Ⅲとトビニタイ土器群Ⅱ（菊池 1972）の「共伴」認定（金盛 1976a）

b．二ツ岩遺跡におけるソーメン紋土器と異系統土器の「共伴」認定（野村・平川編 1982）

c．カリカリウス遺跡における擦紋Ⅱとカリカリウス土器群の「共伴」認定（椙田・椙田 1982）

d．オタフク岩洞窟における擦紋・トビニタイ・オホーツク土器の層位的な出土状況（涌坂 1991）

e．トコロチャシ跡遺跡における「擦文前期」とソーメン紋土器の「共伴」認定（2012年）[3)]

これらを一覧すると、それぞれ10年ごとに通説の妥当性を裏付ける確実な成果が蓄積されているように思えるであろう。しかしながら筆者は、1999年以来、通説を支えるこれらの根拠には、長年に亘って気づかれていない隠れた問題点があることを、広域的な視野に立って縦横に指摘し、全く

別の仮説（「逆転編年」説）が成立することを丁寧に論証してきた[4]。しかし、それについての考古学上の反証は、残念ながらこれまで一度も公表されたことがない。

通説において、誰もが編年論の大前提としているのは、まず二ツ岩遺跡における「共伴」認定であり、トビニタイ遺跡（1・2号竪穴）の重複事例であると考えられる。それに対して、ウトロチャシコツ下遺跡で夙に確認されていた層位事実（河野 1955）は、1964 年に北方編年をめぐって編年学説が対立して以来、すっかり「忘失」ないし「誤読」されたまま、今日に至っている（駒井編 1964 ほか，柳澤 2013b・c）。

このような事態は先史考古学の作法に則り、できるかぎり早急に改善した方が良いであろう。

1）トビニタイ遺跡の竪穴重複事例と「謎のソーメン紋土器３」（第１図）

通説の道東編年はトビニタイ遺跡における、「１号竪穴（ソーメン紋土器１：１～４）➞２号竪穴（トビニタイ土器群Ⅱ（菊池 1972）：13 ～ 23）」という層序に基づいて、基本的に組み立てられている。この点について、筆者を除くと疑問は表明されていないから（柳澤 2001・2008c・2011d・2013a ほか）、大方の研究者が北方編年の大前提となる先史時代の「史実」と認めているのであろう。

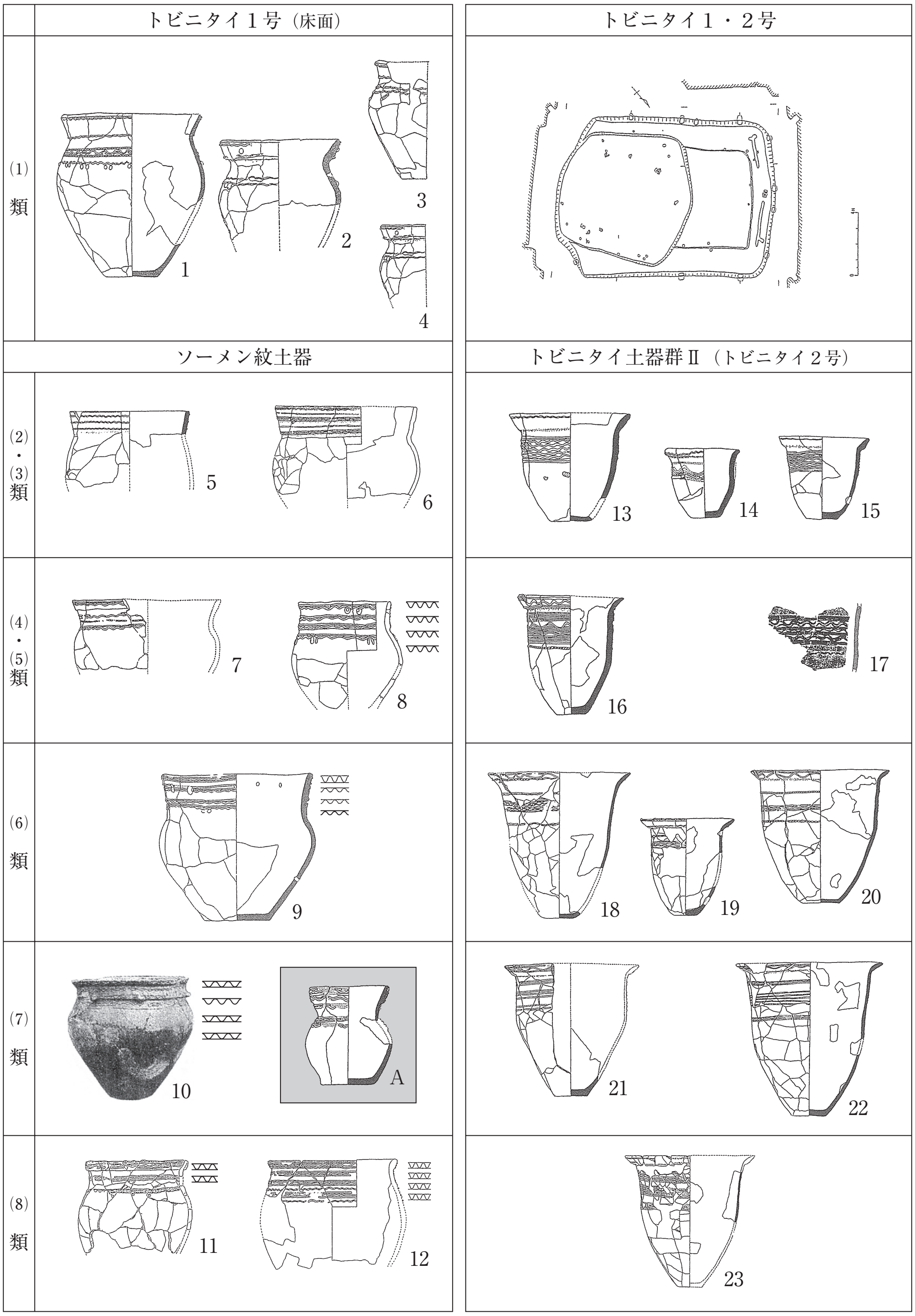
他方、通説の立場であっても、ソーメン紋土器は新旧の差があると古くから認められている。たとえば「藤本ｄ群➞ｅ群」（藤本 1966）なる序列は今でも広く支持され、ごく一般的に引用されている。「ｅ群」として指示された標式資料の範囲を任意に拡大し、さらに細分を試みる考案も見られる。すなわちソーメン紋土器の変遷に関しては、大方の研究者が認めていると思われる。私見では、ソーメン紋土器は１～８単位に細分される（柳澤 2008d ほか）。２号竪穴の「床面」出土とされるＡの小形完形品は、そのうちの（7）類に比定される。

そこで、この編年案をふまえると、オホーツク文化がしだいに「駆逐」され、最後に移動した拠点とされている知床半島では（菊池 1972･1989、天野 2003 ほか）、次のような問いが直ちに提起されよう。通説の道東編年のとおり、ソーメン紋土器（１～ 12）は「擦文前期」土器の影響を受けて「カリカリウス土器群」（柳澤 1999a・2004a）に変容し、それを母体として「トビニタイ土器群Ⅱ」が成立したとするならば、カリカリウス土器群は、13 ～ 23 例のトビニタイ土器群Ⅱよりも以前に、拠点である知床半島に分布していなければならない。しかしながら知床半島では、単純な内容のカリカリウス土器群は、トビニタイ遺跡１・２号竪穴の「床面」上からは勿論、他遺跡においても、これまで出土したと報告されていない[5]。

にもかかわらず、その不在のカリカリウス土器群を母体として、果たして３～ 23 例の「トビニタイ土器群Ⅱ」が成立したと考えられるであろうか。「トビニタイ土器群Ⅱ」の母体をソーメン紋土器と見做す考案は、明らかに型式学的に飛躍しているから、敢えて想定できないであろう（第１図）。だとすると１号竪穴のソーメン紋土器３（Ａ）は、どのようなプロセスを経て２号竪穴の「トビニタイ土器群Ⅱ」へ移行したのであろうか。

ウトロチャシコツ下遺跡の「忘失」された層位事実をもとに、その出土資料（河野 1955・宇田川編 1981）を参照すると、１号竪穴出土とされたＡ例は明らかに矛盾した存在となる（柳澤 1999b ほか）。モヨロ貝塚の 10 号竪穴や貝塚地点における層序、そしてトコロチャシ遺跡１号の重複竪穴の出土事例とも、Ａ例の出土状況は全く整合しない。しかしながら、ポスト擦紋期の貼付紋土器を精密に細分し、それらの３系統を対比すると、Ａ例の編年上の位置はソーメン紋土器３（（7）類）に限定され、ソーメン紋土器１期（（1）類）の１号竪穴には決して伴わないことが判明する。

この点は、旧稿（柳澤 2001・2008c・2011d・2013a）において繰り返し指摘し（第２Ａ～Ｃ図）、その編年上の位置を夙にウトロチャシコツ下遺跡の「東２層（中）」期に求めている[6]。このような通説に反



第１図　トビニタイ遺跡１・２号竪穴の出土土器とソーメン紋土器１～３（（1）～（8）類）の対比

した仮説が、ウトロチャシコツ下遺跡の未公表資料の精査によって、果たして妥当であると立証できるであろうか。

２）「貼付紋系土器」の小細別編年案

これから資料の分析に入る前に、その前提となる事項について少し触れておきたい。旧著において、すでにポスト擦紋期に変遷した「貼付紋系土器」に関しては、究極レベルの精密さを求めて８単位の小細別編年を提案している（柳澤 2008c：415 － 508、2011b）。しかしながら、ソーメン紋土器・カリカリウス土器群、トビニタイ土器群Ⅱのいずれも、混在資料を含まない一括資料に乏しく、細分案の妥当性についての検証、見直しに関しては、新資料の増加と層位事実の蓄積に俟つべき部分がある。また小細別の序列には、本文でも触れるようになお不確かな部分があり、今後の見直しを必要としている。

このように、仮説として整備中の小細別案であるが、千葉大学文学部考古学研究室による 10 年に及ぶ道東の発掘調査では、これまで特に矛盾点は確認されていない。各土器群の変遷観には大筋で、それなりの妥当性があるからと考えられる。以下、**第３図**に示した小細別案（（1）～（8）類）を適用し、未公表資料の分析を進めて行きたい。

２．ウトロチャシコツ下遺跡出土資料の検討（1955 ～ 1981）

ウトロチャシコツ下遺跡をめぐる研究は、ａ.河野広道による『斜里町史』と『網走市史』（河野 1955・1958）の業績、ｂ.宇田川洋氏による一部資料の公表（宇田川編 1981）、ｃ.そして筆者の「見直し」発言（柳澤 1999b・2001・2011d・2013a）を境として、大きく三つの時期に区分される。このうちａ.に関しては、河野の記述をどのように理解するか、ｂ.では、未発表資料の層位的な把握が、そしてｃ.では、トビニタイ遺跡１号竪穴の「謎のソーメン紋土器３（A）」をめぐる、型式学上の矛盾点の合理的な説明などが、それぞれ検討すべき課題となる。

１）河野広道の発掘調査と「オホーツク式土器」編年（第４図）

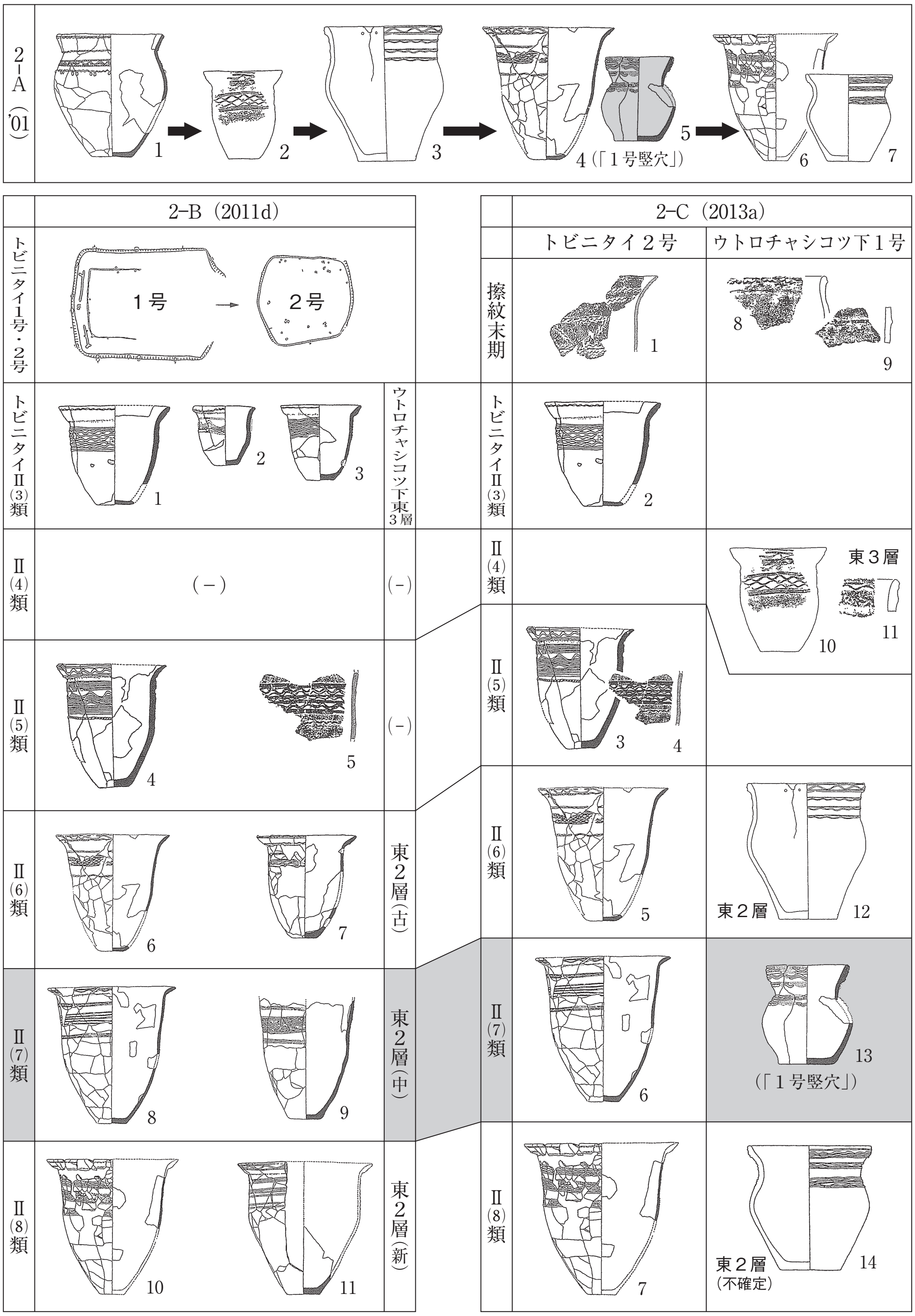
河野広道が北方考古学に残した足跡は大きく、その点は誰もが認めることであろう。「オホーツク式土器」の設定、「オホーツク式土器とオホーツク人」、「擦文土器と擦文人」の関係性や年代観をめぐる論点は、今でも通説的な学説のルーツをなしている。その成り立ちの事情を知ることは、北方考古学の研究において、最も基礎的な作業であると言えよう。

しかしながら河野の業績のうち、その根幹をなす「オホーツク式土器」の編年に関しては、それを正面からとりあげ、学史上の意義を考究した先行研究は、不思議なことに見当らない。若干の手直しを必要とするものの、「オホーツク式土器」の変遷を大きく「刻紋土器→擬縄貼付紋土器→ソーメン紋土器」の序列として捉えたことは、河野の不朽の業績として正当に見直されるべきであろう（柳澤 1999b：52 － 70）。

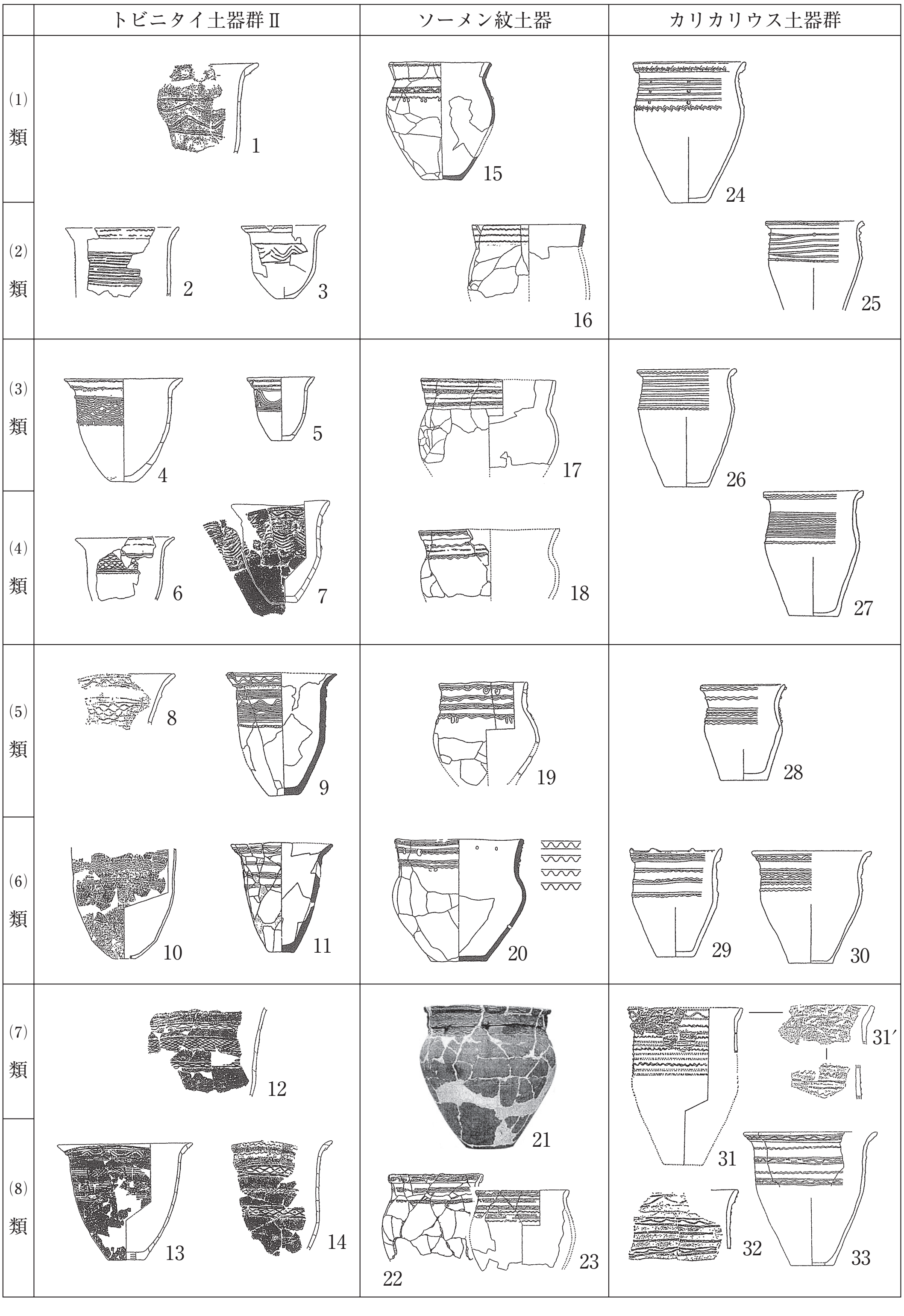
さて、河野の先進的な「オーツク式土器」の編年観は、『斜里町史』と『網走市史』の中で詳細に解説された。それらを参照すると、最新の調査成果や研究発表をもとに、巧みに「オホーツク式土器」を編年していることは、以下のとおり、諸氏の発言からも明瞭に窺うことができる（柳澤 1999b：52 － 70、2008c：17 － 38、2013c：106 － 113）。

（１） モヨロ貝塚における層位的な土器変遷の把握（1947・1948 年）。河野・佐藤達夫が参加。
「刻紋土器：７（砂層）→擬縄貼付紋土器：８・９（貝層）→ソーメン紋土器：10（黒土層）」

（２） モヨロ貝塚 10 号竪穴の調査（1947・1948）：（１）の成果との対比と検証。河野・佐藤が参加。



第2A・B・C図　トビニタイ遺跡「1号竪穴」出土「謎のソーメン紋土器3」の位置（柳澤 2001・2011d・2013a より編成）



第３図　ポスト擦紋期における「貼付紋系土器」の小細別編年案（柳澤 2008b・2008c より編成）

「下層竪穴（刻紋土器：「古い型式」：１１）→上層竪穴（床面下：「新しい擦紋土器」）→上層竪穴床面（擬縄貼付紋土器：「比較的古かるべき」もの（12、13・14）・同左床面（ソーメン紋土器（15 ～ 17、18・19）（佐藤 1964：78 － 88）という序列を確認。

（３） 児玉作左衛門の発言（名取武光・大場利夫とともに，墳墓地点の調査を担当）

モヨロ貝塚の貝層は、「場所によって二層乃至三層若しくはそれ以上になっていることがある」と指摘（児玉 1948：12）。この情報からも、貝層と 10 号竪穴の擬縄貼付紋を持つ土器群に対して、型式差と層位差に基づいた変遷序列が仮設される（7 → 11 → 8・12 ～ 14 → 9）。

（４） 名取武光の発言

1948 年度の調査によって、上層墳（2）・中層墳（9）・下層墳（3）が層位的に発掘された（（1）の層序を参照）。これら「三層の墳墓に土器が副葬されている好条件によって、オホーツク式土器の層位的編年の基礎が確立された」、と明確に指摘（名取 1948a：313）。

以上に例示した（１）～（４）の発言は、1940 年代の当時において、河野広道・児玉作左衛門・名取武光、佐藤達夫の間で、おそらく大差の無い共通の認識になっていたと推察されよう（→河野 1955・58）。

さてモヨロ貝塚の調査に続いて、河野広道は佐藤達夫を助手として、ウトロチャシコツ下遺跡やウトロチャシコツ岬上遺跡の竪穴調査を 1949 年８月に実施している（駒井 1964・大井 1984：註 39、柳澤 1999b：註２・９）。これは斜里町史の編纂に伴う発掘調査であったが、（１）～（４）の各事項について、その妥当性を検証するとともに、オホーツク式土器と擦紋土器の接触･交流の実態を示唆する、「トビニタイ土器群Ⅱ」（「革紐状の貼付紋」を持つ土器群）の関係性を把握するうえで、画期的な層位事実が確認された（**第１表**）[7)]。

『斜里町史』の中では、この新しい成果とモヨロ貝塚における層位所見（（1）･（2））が正確に対比され、次のような「オホーツク式土器」の「型」別編年が公表された（**第４図**、河野 1955・柳澤 1999b）。

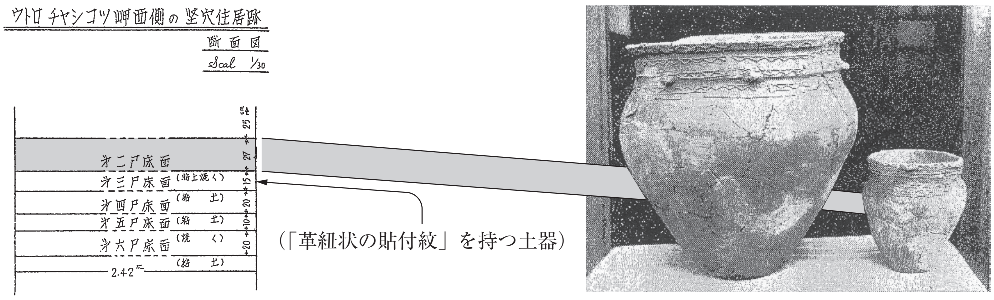
（１）Ａ型土器（1）：「型」紋（文）土器；様々なスタンプ紋を有するもの

（２）Ｂ型土器（2）：刻紋（文）土器；舟窩状の刻紋、交差する沈線紋、突き点紋を有するもの

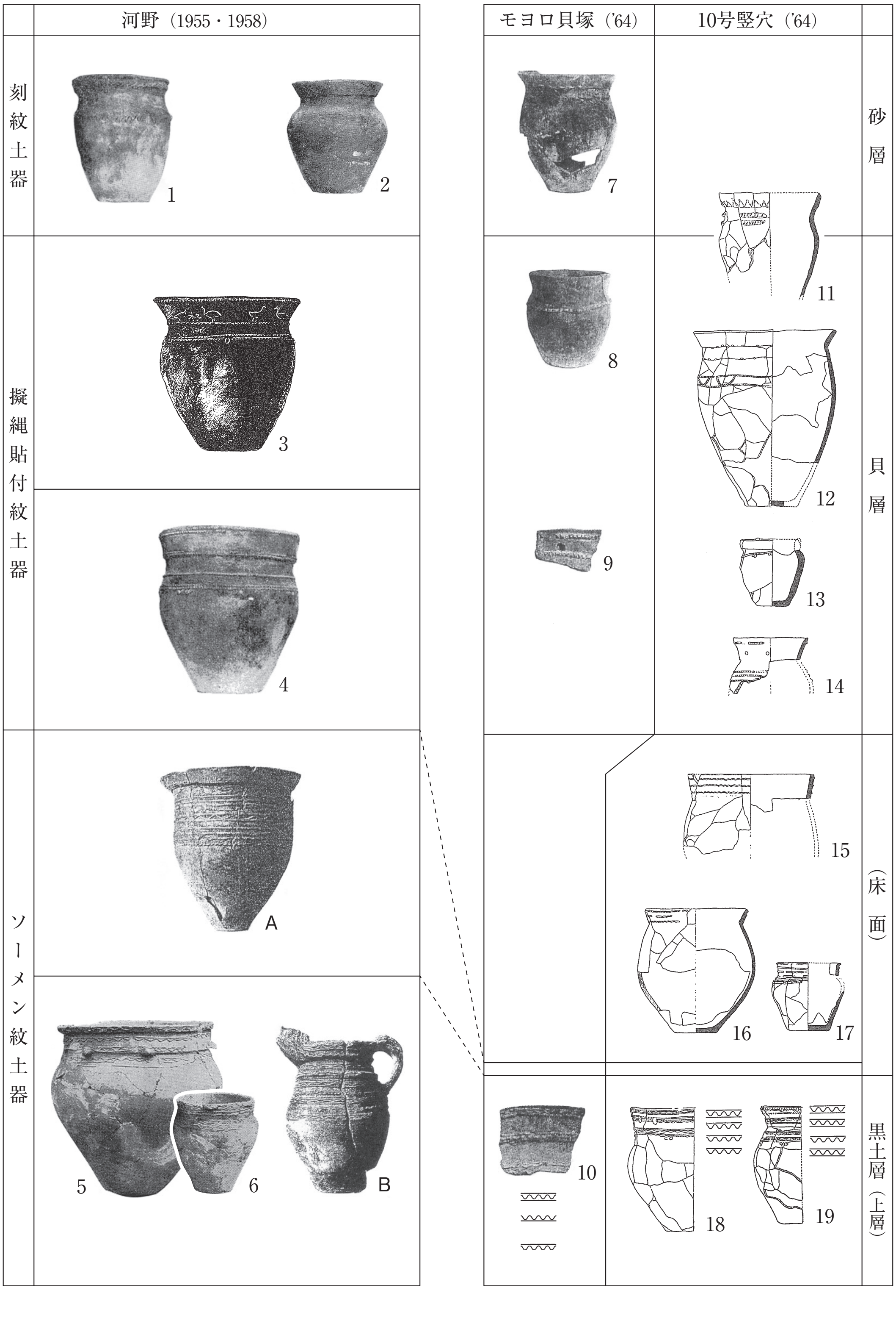
（３）Ｃ型土器（3・4）：擬縄貼付紋（文）土器；縄の形を模した紐状の貼付紋を有するもの

（４）Ｄ型土器（5・6）：ソーメン紋（文）土器；「革紐状」又は「ソーメン紋状」の細い粘土紐を付した型式

またこれらのほかに、中間的な特徴を持つ土器群についても、たとえば「AC 型」（型押紋＋擬縄貼付紋）や「BC 型」（刻紋＋太い擬縄貼付紋）なども指摘されている。さらに注意されるのは、「トビニタイ土器群Ⅱ」に関連して、河野が擬縄貼付紋やソーメン紋の種別と変遷について標本例を示し、非常に細かな観察を行っていることである。いわゆる「東大編年」（大井 1970、駒井編 1964）には、そのような観察や記述は認められない（（　）：筆者の挿入）。



第１表　ウトロチャシコツ下遺跡の層序図とＤ型のソーメン紋土器（河野 1955 より）



第４図　「忘失」された河野広道の「オホーツク式土器」編年案（柳澤 1999b・2013c より編成）と参照資料

（１）擬縄貼付紋（３・４）は、その「出現の初期には太く、年代の下ると共に細くなって次のＤ型（５・６）に移行して行く」（河野 1955）。

（２）擬縄貼付紋は、その「出現の初期には比較的太いが（８）、年代の下るに従って太さを減ずる（４・９）」（河野 1958）

ついで注目されるのは、ウトロチャシコツ下遺跡の豊富な資料観察をもとにした、ソーメン状貼付紋に関する記述である。これは通説の道東編年において全く「忘失」されているか、または「誤読」されていると考えられる、きわめて重要な指摘である（柳澤 2013b：106 − 110・119 − 121、2013c：106 − 113、（　）・傍点：筆者の挿入）。

（１）「**革紐状のもの**が**ソーメン状のもの**（第４図５・６）よりも古い型式である」（河野 1955）。

（２）ウトロチャシコツ下遺跡の竪穴では、「**第３層からＤ型の革紐状のもの**を、第２層から**Ｄ型のソーメン状のもの**（５・６）を出土している。」（河野 1955）

（３）ソーメン状の貼付紋は、「初期には**革紐状を呈するものがある**。後期のものは**断面が円くなっている。**」（河野 1958）

河野が引用した国後島ポンキナシリ遺跡の土器群のうち、ソーメン状の貼付紋のもの（Ｂ）（平光 1929、山内 1933）は後期の型に属するものである（河野 1958）。またここに見える「革紐状のもの」とは、あえて説明を要しないことであるが、トビニタイ土器群Ⅱに最も盛行する断面が平坦な貼付紋、すなわちポンキンシリ遺跡のＡ例に見えるものを指していると考えられる（柳澤 2013c：108 − 112）。

つまりＡ例に近似した「トビニタイ土器群Ⅱ」がウトロチャシコツ下遺跡の「３層」から出土しており、それを「Ｄ型」土器の「古いもの」（≒Ａ例）に比定したうえで、河野は「２層」出土のソーメン紋土器３（５・６例≒Ｂ例）が「後期」の型に属す土器、すなわち「新しいもの」と正しく鑑定しているわけである。したがってウトロチャシコツ下遺跡における層位事実は、通説の道東編年と正反対の逆転した出土状況を示していることになる（旧き「逆転編年」観）。「革紐状の貼付紋」を持つＤ型土器は、河野によれば擬縄貼付紋土器より新しいと明確に認められている。その判断の理由としては、ウトロチャシコツ下遺跡の層序（擬縄貼付紋土器（「３層」）→ソーメン紋土器３（「２層」））に加えて（河野 1955）、先にも指摘したとおり、

（１）モヨロ貝塚の層序（７例→８・９例→ 10 例）

（２）モヨロ貝塚 10 号竪穴の所見（11 例→ 12 〜 14 例、（→９例≒４例）→ 15 〜 17 例→ 18・19 例≒５・６・10 例）

における「層位差・地点差・型式差」にも、とうぜん基づいていると考えられる。

その点に関連して河野が、「モヨロ貝塚では、Ａ、Ｂ両型が出土し、その上にＣ型が、さらにその上層にＤ型がある」（河野 1958）と明確に指摘していることは、通説では全く「忘失」されているが（例えば、熊木 2006-2012 を参照）、あらためて注目されて然るべきではなかろうか。

以上のように、河野の「忘失」された編年観の成り立ちを捉えた場合、ポンキナシリ遺跡のＡ例に対比されたと推定されるウトロチャシコツ下遺跡の「３層」土器は、15 〜 19 例と５・６・Ｂ・10・18・19 例のちょうど中間に位置することが、自ずと予測されることになろう。

さて、河野広道の「オホーツク式土器」編年の大要は、以上のとおりに推察された。これに対して通説を支持する大方の研究者は、河野の編年観の成り立ちをどのように捉えているのであろうか。その点について検討するうえで、最も注目されるのが、宇田川洋氏によって選択的に公表されたウトロチャシコツ下遺跡の資料群であり、また、その後に発表された諸氏の通説的な編年案との関係性である[8)]。

２）宇田川洋氏の公表資料について（第５図）

河野広道の発掘調査ノート（「考古篇１」）は宇田川洋氏の編集によって、1981 年に刊行された。その中でウトロチャシコツ下遺跡１号竪穴住居址（以下、竪穴）の資料は、「Ⅳ -11　ウトロチャシコツ岬西側平地の調査」と題した節で初めて紹介された（宇田川編 1981：158 − 169・239・243・250・251・253）。まず、河野による『斜里町史』の報告（河野 1955）が丁寧に抄録されている。続いて、佐藤達夫の「調査日誌」を引用し、７層に細分した遺物のうち、１層（江戸期）から６層（刻紋期）に至る遺物が実測図や拓本図、写真図版などで示されている。なお２〜６層は、各々竪穴の「床面」として利用されている。

次に「解説」の項では、特に１層出土の遺物をとりあげ、細かく説明されている。他方、「トビニタイ土器群Ⅱ」の出土に係わる「東２・３層」の層序と土器群の内容については、残念ながら何らのコメントも見当たらない。これは何を意味するのであろうか。

３）旧公表資料の細分と編年（第５図）

最下部の７層は「後北式」の文化層に当たるという。それより上位の西６層〜西３層までの土器は、ほぼ刻紋土器Ａに比定される。佐藤の日誌によると、西６・７層は東４層に相当するので、これらの層準が刻紋土器Ａ期に属すると考えられる。それより上位は、貼付紋系土器を出土した「東３層」と「東２層」となる。宇田川氏が公表した資料のうち、両層から出土したものと特定できるのは、その一部に留まる。

（１）東３層土器：１、３（「トビニタイ土器群Ⅱ」）、４：ソーメン紋土器（４）類

（２）「西３層土器」：２（擬縄貼付紋の破片）[9)]

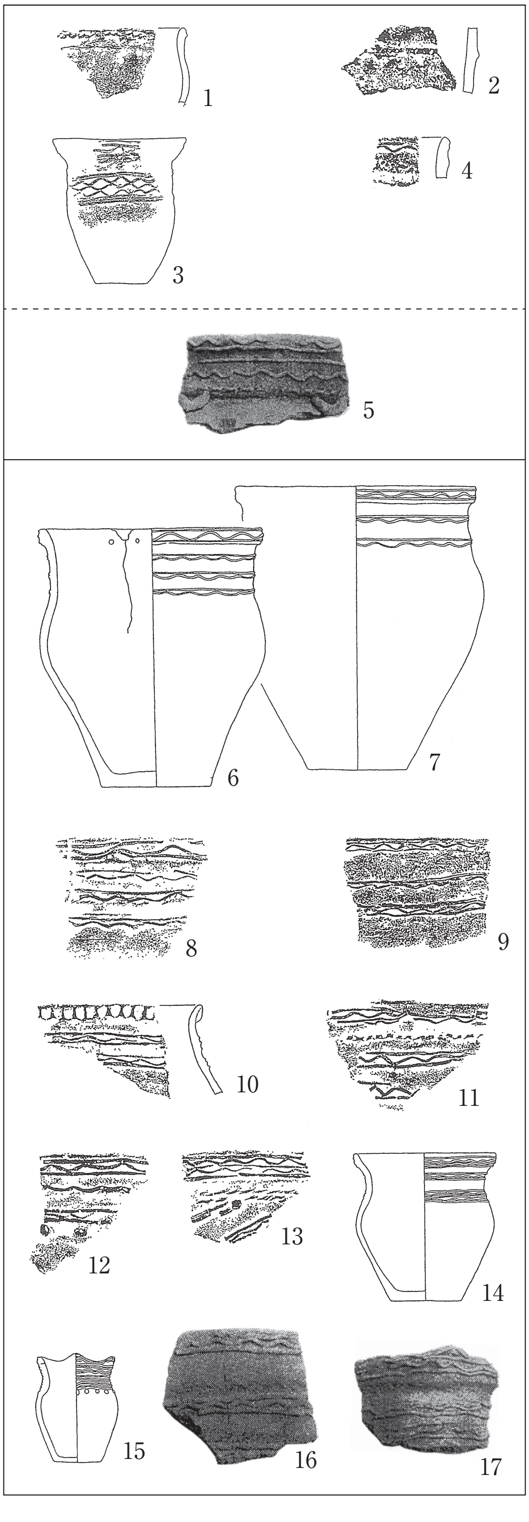
焼失した竪穴の床面から埋土に相当すると推定される「東２層」では、

（１）　ソーメン紋土器３（（６）類：６〜８）

（２）　ソーメン紋土器３（（７）類：９）

（３）　ソーメン紋土器３（（８）類：10 〜 12、13 ？、14）

などが出土している。



第５図　ウトロチャシコツ下遺跡の「東２層」・「東３層」及び層位不詳の出土土器

この他に旧稿において、同じくソーメン紋土器３に比定した15 例もある（柳澤 1999b）。これは胴部の紋様帯を幅広く一帯型に構成しており、トビニタイ土器群Ⅱとオホーツク式土器を折衷したものと考えられる。口縁部には２本の波線、胴部には２本の直線を施し、その間に２本の波線を挿入する。さらに、その下を２本の波線とポッチで縁どり、幅広い紋様帯を構成している。おそらくこれは、ソーメン紋土器（６）類とトビニタイ土器群Ⅱ（６）

類の接触を契機として、折衷的に作られたものであろう。確言はできないが、今はそのように捉えておきたい。

それに対して５例は、出土層が不明な資料であるが、ソーメン紋土器の（５）類に比定される。時期的には、「東３層」の「トビニタイ土器群Ⅱ」（３）と「東２層」のソーメン紋土器３（６～14）の中間に位置するので、その出自と層準が注目される。16・17 例も層位不詳である。どちらもソーメン紋土器の（８）類に属するもので、おそらく「東２層」から出土したと推測される。17 例は 15 例とともに珍しい波状縁の資料であるが、その「貼付紋系土器」編年における意義については旧稿で論じているから、ここでの再論は控えたい（柳澤 2012a：652 － 654）。

さて以上のように観察すると、粘土貼りされた焼失竪穴の床面を境にして区別された「東２層」と「東３層」から出土した土器群、すなわちトビニタイ土器群Ⅱ（５）とソーメン紋土器３（６～15）の層序に関しては、特に疑うべき点は見当らないと言えよう。柱穴などの掘削に伴い、若干の「東２層」土器が「東３層」に混入することは十分に想定される。しかし、双方に帰属する土器群が混交しているような状態は、宇田川氏が掲載した資料の範囲では、また未公表の資料を参照しても、型式・層位の両面から見て容易に想定できない。

宇田川氏は実際に実物を確認しないと分からない情報を紹介しているので、河野のノートやその他の資料をもとに、ウトロチャシコツ下遺跡の多量の資料を実査し、実測・拓本・撮影などの作業を行っていると考えられる。では『アイヌ文化成立史』（1988）において、オホーツク文化の終焉を 11 世紀代以降としていた自説（宇田川 1971a・1975・1977）を撤回し、金盛典夫・椙田光明氏の新説（金盛 1976a・b，金盛・椙田 1984）への転向を表明する際に、「東３層」の「トビニタイ土器群Ⅱ」をどのように位置付けたのであろうか（宇田川 1988：302 － 309）。

４）宇田川氏の編年案とウトロチャシコツ下遺跡資料の関係性

宇田川氏は、河野広道の『斜里町史』のウトロチャシコツ下遺跡の記述をそのまま抄録しており、その内容について、あるいは出土遺物については、特に解説を加えていない（宇田川編 1981）。「東２層」や「東３層」の層序や出土土器について、特に疑問とすべき点は見当らないと理解していたのであろうか（**第６図**）。

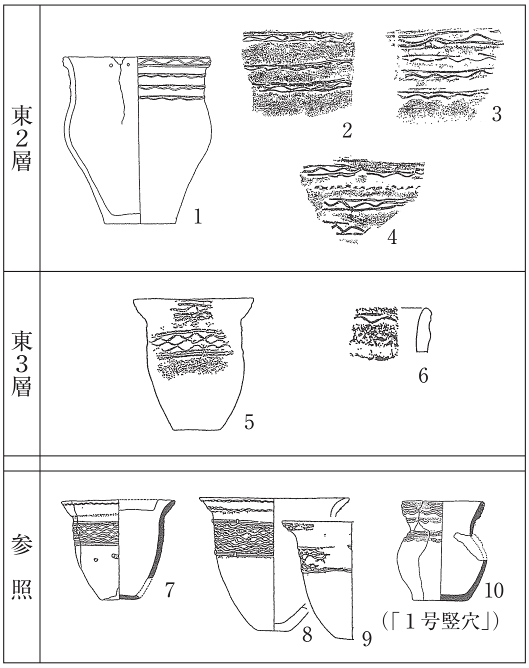
ウトロチャシコツ下遺跡で把握された土器変遷は、「トビニタイ土器群Ⅱ」（５）→ソーメン紋土器（１～４≒トコロチャシ遺跡１号（内側）竪穴）」という序列である。これは明らかにトビニタイ遺跡における「ソーメン紋土器１・ソーメン紋土器３（10）→トビニタイ土器群Ⅱ（５）」とは逆転している。なぜ、このような層位的な矛盾が生じるのか。当然ながら、既存の資料との比較と分析が自ずと求められることになろう。

そこで、５例の「トビニタイ土器群Ⅱ」を観察したい。口縁部には波状紋を挿入し、胴部にはネットソーメン紋を施している。これとよく似た土器は、宇田川氏が 1971 年に報告したオタフク岩遺跡３号竪穴から９例（＝８）として出土している。1964 年に報告されたトビニタイ遺跡２号竪穴にも、９例に近似した土器（７）が含まれている。型式学的にみると、７例と８・９例は誰の目にも類似していると認められよう。つまり５・６例の「東３層」土器と７～９例は、ごく近い時期のものと考えられる。

そのように観察すると、「５・６例≒７～９例（「トビニタイ土器群Ⅱ」）」→１～４例（ソーメン紋土器３）」という序列が想定されることになる。さらに注目されるのは、トビニタイ遺跡１号竪穴（「床面」）から出土したと報告された１０例である。これはソーメン紋土器の（７）類に比定されるので、（６）類の１例・（７）類の２例と（８）類の３・４例の中間に位置すると、型式学的には考えられる。つまり、ウトロチャシコツ下遺跡の層序によれば、「「東３層」土器（５・６≒７～９）→「東２層」土器（１～

4≒10)」という編年案が層位的に想定される。したがって通説の編年観を維持するためには、a．「東３層」→「東２層」という層位事実を端から無視するか、あるいは棚上げ扱いとする、b．「東２層」の１～４例と５～７例の間に収まるはずの10例のソーメン紋土器は、「東３層」よりも下層に位置すると想定するなど、いささか特別な配慮を必要とする。

言い換えると、トビニタイ遺跡における「１号→２号」の変遷序列は不動であるが、ウトロチャシコツ下遺跡の「東３層→東２層」なる層序には、何らかの過誤が伏在すると想定するなど、通説の立場では、層位上の矛盾点を何らかの解釈によって処理している、と推測される。この点は通説編年を左右する問題であるから、改めて納得がいく説明が求められよう。



第６図　1981年時点で判明していたウトロチャシコツ下遺跡における「層位事実」と参照資料

さて『河野広道ノート　考古篇１』から８年後に、宇田川氏は『アイヌ文化成立史』（宇田川1988）を刊行し、先に触れたとおり編年観を大きく修正した。これは概説書での学説転向の表明であり、各時期の年代観を含めて良く分からないところがある（柳澤2004a：150-153）。図示された標本例を用いて、この新しい編年観を示すと**第７図**のような模式図となる。

この改訂された編年案は、トコロチャシ遺跡（１・２：’64）とカリカリウス遺跡（３～６：’82)、ピラガ丘遺跡第Ⅲ地点（７・８：’76)、それに須藤遺跡（９～12：’81）の資料によって基本的に編成されている。本文の記述でも、そのような説明がなされており、年代に関しては、「10世紀ころ」から「13世紀ころ」までは明記されている。しかし、カリカリウス遺跡の土器群以前については、なぜか時期を比定する記述が省かれている。また、ウトロチャシコツ下遺跡の逆転した層序（第６図５・６→１～４）については、特に触れられていない。したがって改訂編年案では、トビニタイ遺跡における重複竪穴の出土事例を軸として、「ソーメン文土器→カリカリウス土器群→トビニタイ土器群Ⅱ→「ⅡとⅠの中間型式」→トビニタイ土器群Ⅰ」に至る、単系的な土器変遷を想定していると考えられる。

しかしながらウトロチャシコツ下遺跡の「忘失」、または「棚上げ」扱いされた層位事実によれば、「10世紀ころ」とされる８例は「東３層」に対比される。そしてソーメン紋土器２・３に比定される１・２例も「東２層」よりは古く、「東３層」（トビニタイ土器群Ⅱ）に近い時期に属すると認められる。カリカリウス土器群の位置付けに関しては、知床半島のどの遺跡においても、１・２例と８例の間に挿入すべき根拠は見いだされない。宇田川氏はどのような理由から、ウトロチャシコツ下遺跡における「東３層→東２層」の層位事実と出土資料を「忘失」してしまったのであろうか。この点は未公表の資料を検討すると、さらに大きな疑問点へと繋がる。

３．旭川市博物館所蔵の未公表資料

河野広道の収集した考古コレクションは、その大部分が旭川市博物館に収蔵されている。瀬川拓郎氏のご配慮により、本年（2014年）の春に実査の機会に恵まれた。10月下旬にも再訪し、ウトロチャ

シコツ下遺跡などの資料を改めて観察し、記録と撮影などの作業を行った。ウトロチャシコツ下遺跡から出土した資料の正確な数量は今のところ良く分からない。宇田川氏が紹介したノートによると､次のような内容になる。

a．河野広道の記載

東２層：オホーツク式土器約 30 個分の破片（そのうち 15 個は復元）

東３層：オホーツク式土器の完形品２個、破片若干

b．佐藤達夫の記載

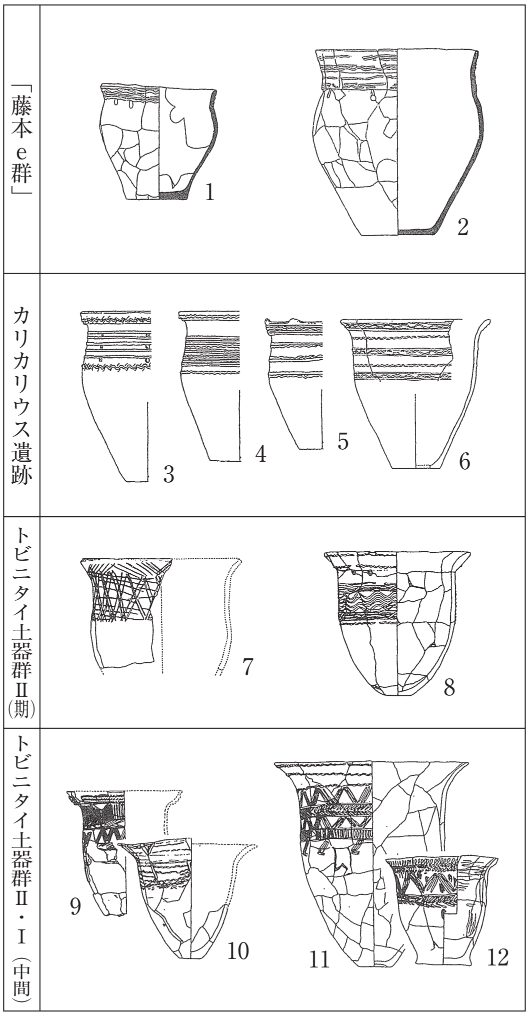
東２層～炉（８月３日）：貼付文オホーツク式土器 11 個体分

東２層（８月６日）:「１グループ 11 ヶ体分、１グループ５或は６ヶ体分」

東２層（８月７日）:「土器２、３ヶ体分」

東３層（８月７日）:小形（まゝ）完形３ヶ、大型６ヶ体分

他方、収蔵品の『考古資料目録』や収蔵棚の悉皆的な点検でも、出土した数量は上記のデータと合わないので､いまだ全貌を把握するには至っていない。それでも、「東２・３層」に係わる大半の資料（30 ～ 31 個体、９個体）については２回に及ぶ実査でほぼ特定し、その観察と記録を済ませることができた。以下、出土層の判明したものから不詳のものへ、という順序で各資料の特徴を記載し、「鍵」となる資料については、少し細かな観察と比較を試みたい。



第７図　『アイヌ文化成立史』における宇田川洋氏の道北編年案（宇田川 1988 より編成）

１）「東３層」出土の古い土器群（第８図）

ウトロチャシコツ下遺跡の資料には、ホワイトまたは墨を用いて土器片の表裏に注記されているものがある。それらのうち、確実に「東３層」と特定できるものは少なく、１～６例などが実例として挙げられる。これらは河野の言う「破片若干」に相当するものと思われる。

資料１：擬縄貼付紋土器の口縁部片。肥厚した口縁部の上端、及び下端（その大半は剥脱)、さらにその下にも擬縄貼付紋を施し、ボタン状貼付紋を間に挿入する（注記：540)。

資料２：擬縄貼付紋土器の胴部と推定される破片（注記：540)。

資料３：口縁部に１本の波状貼付紋と断面がやや平坦な直線貼付紋を施す。口径の小さい小形土器と思われる。表面に「東３層」の注記が見える。口縁部は朝顔形に外反し、以下は壺形ないし砲弾型に窄まると推定される。これらの点から見て、トビニタイ土器群Ⅱとソーメン紋土器の特徴を兼ね備えた古手のもの（(１) ～（２）類）と観察される（注記：545)。

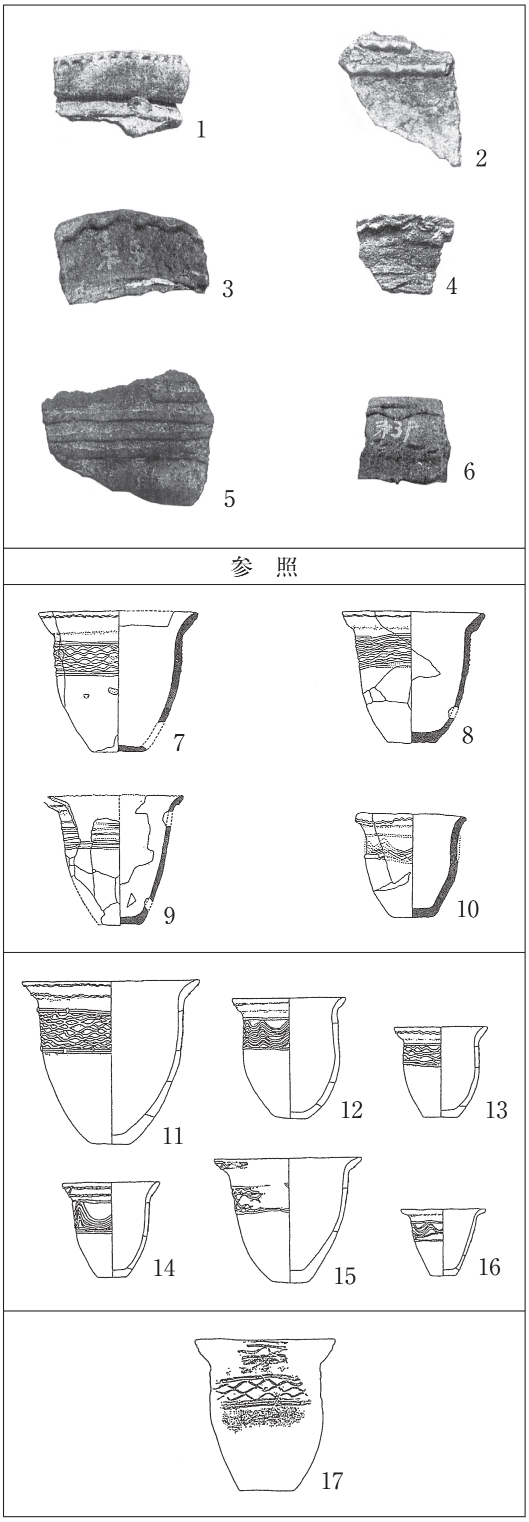
資料４：肥厚した巾狭い口縁部には１本の波状貼付紋を、胴部には平坦な直線貼付線の下に大きく低い波状紋を重ねるか、もしくはネットソーメン紋状に施し、おそらく直線貼付紋で閉じて紋様帯を構成していると推定される。裏面には「東３層」の注記がある。トビニタイ土器群Ⅱの（１）～（４）類のいずれかに比定されるものと考えられる（注記：545)。

資料５：断面が平坦な直線貼付紋を多条に施す胴部片。「東３層」の注記を欠くが、３・４例と同じ袋に収納されている。胎土·焼成·調整からみて、トビニタイ土器群Ⅱに比定される。胴部の貼付紋の施紋からみて、「古い部分」（1）～（3）類に比定される（注記：545）。

資料６：やや肥厚した口縁部の破片。直線＋波線と波線の貼付紋を施す。上の貼付紋は軽く押さえられており、その断面は丸みを帯びている。直線＋波線の貼付紋と断面形からみて、ソーメン紋土器（4）類に比定される（注記：545）。なお本例は未公表ではなく、宇田川氏によって拓本図で示されている（第５図４）。１～５例と比較・参照のために、ここで再掲した。

以上の観察をもとに「東３層」に帰属する「破片若干」について検討してみよう。まず１・２例は、「東３層」において、擬縄貼付紋土器の時期にも竪穴が営まれたことを示す新資料として注目されよう（第５図２，柳澤 1999b：64 － 67）。

次にトビニタイ遺跡２号竪穴の資料を一覧すると、５例に酷似した多条の直線紋を施した９例に気づく。宇田川氏が報告したオタフク岩遺跡の４号竪穴資料では、複線構成の口縁部を持つ 11 例や 14 例などが３例に類似する。また 15 例の口縁部の紋様構成は、「東３層」の 17 例に酷似している。その胴部のネットソーメン紋は、トビニタイ遺跡の７例やオタフク岩遺跡の 11・13・15 例に対比される。そして、４例の幅狭い口端部に施された１本波線は７～ 10 例や 12・13 例にも見られる。



第８図　「東３層」から出土した「古い部分」の土器

このように観察すると、「東３層」土器のうち、ソーメン紋土器の（4）類に比定した６例を除いて、それ以外の３～５例と 17 例は、トビニタイ土器群Ⅱの（1）～（4）類の古い土器群を伴う可能性が高いと認められよう。復元された 17 例は大破片の資料であって、口縁部は僅か５％に過ぎないが、胴部と底部は全周するほど残存している。口径は 12.4cm、高さは 11cm 代、底径は 4.5cm の小型品である。佐藤の言う「小形完形品」に該当するものかは判然としない。

本例と６例が、それぞれトビニタイ土器群Ⅱとソーメン紋土器（4）類に比定されること、３例が折衷的な特徴を持つことなどを考慮すると、４例もおそらく近接した時期に位置するのであろう。

しかし、その点は「東３層」の完形品を観察する際に、改めて言及することにしたい。

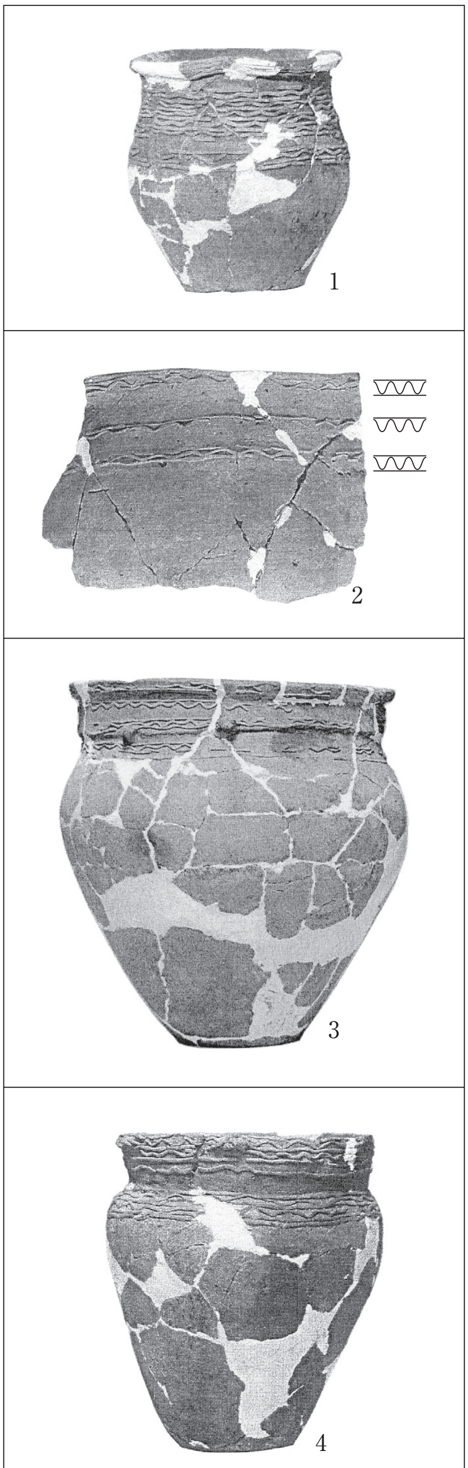
ここでは本層の資料に、古手の貼付紋系土器（1）～（4）類（←擬縄貼付紋土器）が確実に含まれていることを確認し、次に「東２層」の資料を観察したい。

2）「東２層」の新しい土器群

「東２層」では、「約 30 ～ 31 個体」の土器が検出されたと記載されている。後述のように、その中には層位情報が欠落、又は不確かなものも含まれている。**第９図**の１～４例は、確実に「東２層」と判明しているソーメン紋土器３の完形品である。

資料１

本例は他遺跡ではあまり類例を見ない資料である。幅広い胴部紋様の下に副紋様帯が独立して施されており、トビニタイ土器群Ⅱの（6）類以降（ソーメン紋土器３並行）に属すると推定される。底部に墨で「第二文化層」と注記されている。最大径は胴部にあり、器形はオホーツク式的な壺形を呈する。貼付紋は平坦で高さがあり、口縁部は「折り返し」状に幅狭く作られ、カリカリウス的な特徴を持つ[10]。三者の要素・手法を折衷した土器と考えられる。「らせん技法」（青柳 1995）が認められる（注記：3028・414）。



第９図　「東２層」から出土した「新しい部分」の土器　その（１）

資料２

ソーメン紋土器（7）類（３期）に比定される。口縁部は 50％弱、胴部は 30％が残存し、底部は破片の状態でほぼ完存している。２例と同様に石膏入れされている。「復元された 15 個」に該当するものであろう。復元が未完成のため、口径や高さは不詳。写真部分では 13.2cm、底径は 8.8 ～ 9.5cm を測る。大形品に属し、最大径は胴部にある。紋様は、口縁部では「直線＋波線＋直線」、胴部では「直線＋波線」と「直線＋波線＋直線」の２帯で構成される。口縁部は幅狭く、軽く肥厚している。貼付線の断面は丸味を帯びるが、平坦な部分も見られる。

資料３

ソーメン紋土器（7）類（３期）に比定される。口縁部は 83％、胴部は 70％、底部 99％が残存する。口径は 32.0 ～ 32.6cm、高さは 35.6 ～ 36.2cm で、底径は 12.0cm を測る。最大径は胴部にあり、大型品に属する。紋様は口縁部では「直線＋波線＋直線」、胴部では「直線＋波線」と「直線＋波線＋直線」で構成される。口縁部は幅狭く、軽く肥厚する。貼付線の断面は丸味を帯び

ている。口頸部には小突起が４つ残る。一つには目が付けられており､動物の頭部を模している。本資料は『斜里町史』（河野 1955）にＤ型：ソーメン紋土器（｢第二層｣）の標本例として紹介された。胴部下位にも墨で「第二文化層」と注記されている。宇田川編（1981）では未掲載。

資料４

ソーメン紋土器（８）類（３期）に比定される。口径は 14.8 ～ 15.2cm、高さは 17.5 ～ 17.7cm、底径は 6.5 ～ 6.7cm を測る。口縁部は 85％、胴部は 92％、底部は 100％が残存する。最大径は胴部の上位にある。紋様は、口縁部では２単位の「直線＋波線」を直線で閉じる。胴部でも同じモチーフを二段に施し、下端を直線２本で閉じる。口縁部の下端には、粗雑な波線を挿入する。口縁部・胴部ともに「らせん技法」を用いる。口縁部には一部で欠損しているが、４～５個の楕円形の張瘤が取り付けられている。貼付紋の断面は高さがあり、軽く押さえられている。口縁部ではかなり平坦に押さえられた部分が見られる。胴部も部分によって異なる。底部には、「ウトロチャシコツ下竪穴　第二文化層」と墨入れされている（注記：1352）。なお『考古資料目録』では，「ウトロ」[11] と記載されている。

本例も『斜里町史』に紹介されているが、宇田川編（1981）には未掲載である。

「東２層」の完形品は以上のほかに、ごく一部が拓本で紹介されたもの（宇田川編 1981）を含めて５点ある（**第 10 図**）。いずれもソーメン紋土器３に比定される。

資料１

ソーメン紋土器（８）類（３期）に比定される。口縁部は 100％、胴部は 45％が残存し、底部は完存する。口径は 21.6 ～ 23cm、高さは 27.3 ～ 27.6cm、底径は 10.0 ～ 10.2cm を測る。最大径は胴部にある。紋様は、口縁部では「直線＋波線」を二段に重ねて直線で閉じる。胴部では、トビニタイ土器群Ⅰ - Ⅱ・Ⅱに見られる「区切り斜線」（柳澤 2001・2003 ほか）を「直線＋波線＋直線」で構成し、その両端にポッチを付けて２本の擬縄貼付線の間に反復・挿入し、幅広い紋様帯を形づくる。これはトビニタイ系統の紋様を借用し、「先祖返り」的に施紋したものと解釈される。貼付線は高さがあり、平坦に整えられた部分と丸みを帯びた部分が併存する。カリカリウス土器群の貼付紋に類似する。施紋は「らせん技法」を用いている。胴部中位に最大径があり、大きな底部に繋がる。このような特徴から見て、２例はソーメン紋土器３（口縁部）とトビニタイ土器群Ⅰ・Ⅰ - Ⅱ（胴部）とカリカリウス的な貼付紋を折衷したキメラ土器と捉えられる。（８）類の時期には、古いモチーフを「先祖返り」させる手法が好まれており、ふ化場第１遺跡や美幌町の日甜工場遺跡などに､トビニタイ土器群Ⅱの好例がある。本例は三系統の「貼付紋系土器」の同時代性を示唆する資料として、特に注目されよう。宇田川氏によって、「東２層」の土器として部分的に紹介されている（注記：1347、第５図 13 例：「東２層」と同一個体)。

資料２

ソーメン紋土器（７）類（３期）に比定される。口径は 16.6cm､高さは 18.3 ～ 19.1cm､底径は 9.0cm を測る。口縁部は 94％、胴部は 46％、底部 89％が残存する。最大径は口縁部にある。括れ以下の胴部の膨らみは１～３例よりも弱く､縦長の印象を与える。紋様の位置は次の３例に類似する。軽く肥厚した口縁部（「直線＋波線＋直線」）と頸部（「直線＋波線」､「直線＋波線＋直線」）の３帯で構成される。貼付線の断面は丸みを帯びた部分があり、方形で軽く平坦化している。口縁・胴部には「らせん技法」が認められる。底部には、朱字で「ウトロチャシコツ竪穴第二層」と注記されている（紙ラベル：72)。

資料３

ソーメン紋土器（８）類（３期）に比定される。口縁部は 91％、胴部は 67％、底部は 100％が残存する。口径は 24.6cm、高さは 27.2 ～ 28.5cm、底径は 9.2 ～ 9.7cm を測る。最大径は胴部

中位にある。幅広い口縁部に「直線＋波線＋直線」を、その下に１本の波線を施す。括れ部にも「直線＋波線＋直線」を加え、それ以下を幅広く無紋としている。いずれの貼付線もソーメン紋土器とは異なり、カリカリウス土器群のように軽く平坦に押さえられ、丸みを帯びた方形を呈する。三段目の貼付紋は押さえが弱い。口縁部の下端には１本の波線が施される。これはカリカリウス土器群とトビニタイ土器群Ⅱの（８）類に盛行する波状貼付線の挿入（柳澤 2008b：83、2012a）に相関する手法として注目される。宇田川氏により「東２層」出土品として部分的に紹介されている（注記：1348）。口縁部には「らせん技法」が認められる。

資料４

ソーメン紋土器（８）類（３期）に比定される。口径は 15.9 ～ 17.2cm、高さは 20.5 ～ 21.5cm、底径は 6.5cm を測る。口縁部は 100％、胴部は 48％が残存し、底部は 100％が完存する。最大径は胴部中位にあり、トビニタイ土器群Ⅱ（８）類のように「樽」形を呈する（柳澤 2007b：56 － 62 ほか）。口縁部と胴部に３帯の「直線＋波線＋直線」の単位紋様を施す。貼付紋はいずれも軽く平坦に押さえられ、３例と共通している。口縁部・胴部ともに「らせん技法」が認められる。口縁部の下には３例に見える波線に代えて、擬縄貼付線が挿入されている。以上に見える特徴は、根室半島のトーサムポロ遺跡 R- １地点に共通して認められる。（８）類期における彼我の接触と交流が想定されよう。石膏面には「ウトロチャシコツ下竪穴、第二文化層」と墨入れされている（注記：3029・414、第５図 10 例：「東２層」と同一個体）。

以上を（前篇）とする。

2014 年８月 12 日稿
11 月 12 改稿

1
2
3
4

第 10 図　「東２層」から出土した「新しい部分」の土器　その（２）

謝辞

ウトロチャシコツ下遺跡などの二度に亘る資料の実査（３月 28 日、10 月 30 ～ 11 月２日）に際しては、瀬川拓郎氏と友田哲弘氏のお世話になりました。本稿への資料の引用・掲載については、瀬川拓郎氏よりご了解をいただきました。格別なるご配慮に厚くお礼を申し上げます。通読と校正に関しては、千葉大学大学院人文社会科学研究科博士課程の小林嵩、同 OB・OG の長山明弘・佃（松嶋）沙奈さ

んにお願いしました。また改稿に際しては、自身の観察とともに、長山明弘君が第２回目の実査の際に作成した観察シートを参照して数値情報を補い、記載を一部で補訂しました。末筆ながらここに感謝の意を表します。

註

１）大井晴男によると禅龍寺遺跡は「競馬場西端遺跡」に当たるとされている。大井は、『斜里町史』（先史時代史、河野 1955）に見える「包含層は三層を区別し得るが、第一層と第二層とはオホーツク式を」、「第三層は擦紋土器と後北Ｃ・Ｄ式を」出土するという「競馬場西端遺跡」の記述を紹介し、諸々の疑問点を示したうえで、河野が報告した「層位関係は、むしろ理解し難いものになろう」と述べている（大井 1984：42-44）。ウトロチャシコツ下遺跡の層序についても、宇田川氏が公表した資料と層位情報（宇田川編 1981）を参照しつつ、「第３層床面」から出土した「接触様式」・「融合型式」（「トビニタイ土器Ⅱ」）の存在を否定的に扱っている（前掲：38-42）。これはモヨロ貝塚 10 号竪穴の床面下から新しい擦紋土器片を発見したという佐藤達夫の記述（佐藤 1964）に対して、一方的に疑問を表明して否定した事例（大井 1970：35）と何ら変わりない。自説に合致しない物証や、確認された確かな層位事実について、考古学上の検証を尽くすことなく、一様に疑問を表明し、これを否定する姿勢（大井 1970 ～ 1972b・1984、佐藤 1972：483；註５を参照）は、道北においても共通して認められる。例えば、内路遺跡や上泊遺跡における層位事実の「忘失」などが、その代表例として挙げられる（柳澤 2000：98-116・2006a：89-91、106-110）。

２）現在、以下の三篇を『古代』（早稲田大学考古学会）に投稿中である。

１）「灰白色火山灰と道東「貼付紋系土器」編年の見直し」（2014 年６月 26 日稿，10 月校了。）

２）「水禽・「鰭」状モチーフから見た「貼付紋系土器」の広域編年」（2014 年７月 11 日稿，10 月校了）

３）「道東における「オホーツク文化」年代観の改訂（前篇）－「遼時代の素焼土器」と伴出遺物をめぐって－」（2014 年４月５日稿、『（千葉大学）人文研究』第 44 号、2015 年３月刊）

３）トコロチャシ跡遺跡におけるソーメン紋土器と「擦文前期」土器との「共伴」認定（塚本 2010・2012）は、通説を根元から支える二ツ岩遺跡における「共伴」認定の妥当性をまさに裏付けるものと、一般に受け止められるであろう。しかしそのように判断する前に、考古学的に説明されるべき多くの物証（キメラ（折衷）土器）や層位事実があるのではなかろうか。道東には「擦文前期」の資料がかなり蓄積されているが、それらに帰属する竪穴住居址は、なぜ道央や道北のように検出されないのか。旧き竪穴跡を再利用するオホーツク人の活動が深く関係している可能性について、「古い土器」の「送り」儀礼とともに、あらためて検討されるべき論点と言えよう（柳澤 2000・2003・2007a，2005a：127-128，2008b：84-89、2013c：143、2014b：56-73）。なお、（ａ）～（ｄ）の「共伴」事例については、旧稿において繰り返し疑問を表明し、その妥当性の有無について考古学的な「検証」を試みている（（ａ）：柳澤 2005a、（ｂ）：2003・2007a、（ｃ）：2004a・2008b・2012a　（ｄ）：2004a・2005a・2005b・2007b・2011a ほか）。その「検証」に対する熊木俊朗氏の「寸評」は、ある種の「誤読」や「誤解」に由来するものと思われる（榊田・熊木 2014：142-143）。

４）註３に掲げた（ａ）～（ｄ）などの論考をまとめた旧著（柳澤 2008c・2011b）、及び 2015 年３月に刊行する新著（『北方考古学の新展開』、六一書房）も併せて参照されたい。

５）この疑問については、旧稿の中で矛盾点を細かく検討している（柳澤 2008b：65-72・84-89・2008c）。また最近も竪穴の変遷に関連して、同じ所見を述べるところがあった（柳澤 2011d：23）。筆者が「カリカリウス土器群」を仮設し（柳澤 1999a）、これを８単位に細分したうえで、トビニタイ土器群Ⅱとソーメン紋土器との併行的な変遷を論じて以来（柳澤 2004：194-2011，2005a・2005b）、先行する「トビニタイ土器（トビニタイⅠ～Ⅲ型）・「カリカリウス型」（大西 1996b）に代わって、「トビニタイ土器群」と「カリカリウス土器群」を一括し、「トビニタイ式土器」なる新型式が創出され、著しく混乱した事態に陥っている（榊田 2006・2007・2010 ほか）。学史上に「忘失」できない出来事として、ここに備忘のために書き留めておく。

６）第２A 図に掲載したものは一部に過ぎない。この他に多くの旧稿（柳澤 2008a：45・2008b：71、2013b：63-68）においても、「謎のソーメン紋土器３」を繰り返し取りあげている。このうち 2008a 論文では、トビニタイ土器群Ⅱ（6）類と対比しているが、これは誤って貼付したものである。遅ればせながら第２図の示すとおり、Ⅱ（7）類に並行すると訂正しておきたい。なお、2013b 論文の註７）において、「謎のソーメン紋土器３」の出土が付表（駒井編 1964：159）で確認できないと述べている。その後、それに該当すると思われる記載があることに気づいたので、ここに撤回しておきたい。

７）註１）で触れたとおり、ウトロチャシコツ下遺跡の層位事実に対して、大井晴男は否定的に論評している（大井 1984）。「第三層床面（東３層）」におけるトビニタイ土器群Ⅱの伴出は「疑いなきをえない」と述べた見解は、晩年にいたるまで訂正されていない。元地遺跡における層位事実（魚骨層Ⅰ→黒土層）を高く評価し（大井 1972b）、それと矛盾するウトロチャシコツ下遺跡の「層位事実」を長年に亘って不問とし、実質的には「忘失」扱いしていたと推察される（大井 2004）。因みに、元地遺跡

の黒土層から厚手の「接触様式土器」(元地式)に伴って出土した擦紋Ⅲは、美幌町の元町遺跡でトビニタイ土器群Ⅱとともに出土した擦紋Ⅲに近い時期に比定される。大井は、この元町遺跡の伴出事例を全くの「共伴」と見做し、元地遺跡の魚骨層Ⅰ(刻紋・沈線紋土器=ソーメン紋土器)→黒土層(「接触様式土器」=擦紋Ⅲ(「東大編年」:擦文第2)なる擬似的な層位序列とともに、自らの道北・道東「地域差(地方差)」編年説の不動の根拠としている。それに対して佐藤達夫は、元町遺跡の擦紋Ⅲを終末に近い(6)期に比定し、トビニタイ土器群Ⅱはソーメン紋土器とともにポスト擦紋期に位置づけている(佐藤 1972)。なぜ、このように同じ出土資料をめぐって、佐藤と大井の間に、そして山内博士と大井の間には、著しい編年観の違いが生じたのであろうか。学史論・方法論の理解に著しい懸隔があることは、大井の一連の発言(大井 1970 〜 1972b)からみて敢えて説明を要しないであろう。しかし、元町遺跡や元地遺跡の出土状況をめぐる対立には、しかるべき原因があると考えられる。これから細かく観察するウトロチャシコツ下遺跡の未公表資料は、佐藤が自ら発掘したものである。道東・道北編年の体系は、大井が否定した「東3層」と「東2層」の多量の土器群の吟味をふまえて組み立てられていると考えられる(佐藤 1972)。したがって佐藤が、元町遺跡の「トビニタイ土器群Ⅱ」と擦紋Ⅲ(6)の関係を混在と見做し、さらにトビニタイ遺跡1・2号竪穴の単系的な変遷観(「謎のソーメン紋土器3」の完形品を含む)に疑問符を付けた事情は以下に詳述するとおり、ウトロチャシコツ下遺跡の未公表資料を含む、明白な複数の層位事実の把握と型式学的な検討に基づく、当然の判断であったと推察される(柳澤 1999b:84-89、2013a:718-720、2013b:71-76・註 13 ほか)。

8)通説の編年案のうち代表的な例としては、宇田川(1988・2002)、右代(1991・1995)、澤井(1992・1995・2007)、簑島(2001)、大西(1996a・b, 2001・2009)、瀬川(2005・2007)、熊木(2006・2010・2011)、榊田(2006・2010)などの諸氏の論考が挙げられる。

9)第5図4例の破片は「西3層」から出土したものと記載されている(宇田川編 1981:160)。これは No. 545 ケース中のビニール袋(ラベル「1748　1949. 8　オホーツク9　ウトロチャシコツ」)に収められている。その袋には第8図3・5・6の土器破片も入っている。「西3層」の注記や記載は見当らないので、第5図4例は「東3層」から出土している可能性が高いと考えられる。他の出土資料からも、そのように理解した方が矛盾がないように思われる。以下、そのように扱うことにしたい

10)カリカリウス遺跡におけるカリカリウス土器群に施された貼付紋は、断面を平坦にしているものが目立つ。トビニタイ土器群Ⅱに比べるとやや高さがあり、軽く押さえられたものから、かなり平坦なものまで個体によって異なる。類似する貼付紋扱いは、根室半島のトーサムポロ遺跡 R- 1地点のソーメン紋土器2・3にも認められる(柳澤 2007b:56-62, 2008c:275-280)。これらはトビニタイ土器群Ⅱとの接触や交流を反映する現象と考えられ、貼付紋系土器の後半段階に、おそらく(4)類ないし(5)類頃から、特に(8)類期において最も顕著に認められるようである。

11)ラベルに「ウトロ」と記載されていることから、1949・1951 年に『斜里町史』の編纂に伴い試掘された「ウトロ遺跡」の出土品である可能性も指摘されよう。ただし試掘された箇所は、「ウトロ神社下・ウトロ市街地・築港事務所」とされており、出土資料は知床博物館に所蔵されている。ウトロチャシコツ下遺跡の完形品の中には、「ウトロチャシコツ下竪穴」と注記されていながら、収蔵品の『考古資料目録』では「ウトロ」出土と記載されている例もある(注記:3431 〜 3433)。4例は、他の完形品と同様の仕上げで石膏入れされており、ウトロチャシコツ下遺跡の出土品である可能性が高いと考えられる。以下、そのように捉えて議論を進めたい。

引用・参考文献

青柳文吉 1995『湧別町川西遺跡』湧別町教育委員会

網走市立郷土資料館編 1986「モヨロ貝塚」『網走市立郷土資料館収蔵考古資料目録』1

天野哲也 2003「オホーツク文化とは何か」『新北海道の古代』2(続縄文・オホーツク文化)北海道新聞社

五十嵐国宏 1989「千島列島出土のオホーツク式土器」『根室市博物館開設準備室紀要』3

石川朗 2009『釧路市　幣舞2遺跡調査報告書　Ⅱ』釧路市埋蔵文化財センター

石附喜三男・北構保男 1973『伊茶仁遺跡　B地点発掘報告書　1972 〜 1973』北地文化研究会

今村啓爾 2011「異系統土器の出会い―土器研究の可能性を求めて―」『異系統土器の出会い』(今村啓爾編)同成社

右代啓視 1991「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』19

右代啓視 1995「オホーツク文化にかかわる編年対比」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館

右代啓視 2003「オホーツク文化の土器・石器・骨角器」『新北海道の古代』2(続縄文・オホーツク文化)北海道新聞社

宇田川洋 1971a「5. 結語」『弟子屈町下鐺別遺跡発掘調査報告書』弟子屈町教育委員会

宇田川洋 1971b「オタフク岩遺跡」『羅臼町文化財報告』1

宇田川洋 1975「サシルイ北岸遺跡の調査」『羅臼町文化財報告』2(幾田)

宇田川洋 1977『北海道の考古学』2　北海道出版企画センター

宇田川洋 1980『アイヌ考古学』教育社
宇田川洋 1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
宇田川洋 2002「もう一つの日本列島史」『北の異界－古代オホーツクと氷民文化－』東京大学出版会
宇田川洋 2008a「知床の概要」『知床の考古』斜里町教育委員会
宇田川洋 2008b「擦文・オホーツク・トビニタイ文化」『知床の考古』斜里町教育委員会
宇田川洋 2008c「表１　知床と周辺地域の文化編年（知床の概要）」『知床の考古』斜里町教育委員会
宇田川洋編 1981『河野広道ノート　考古篇１』北海道出版企画センター
大井晴男 1970「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』４
大井晴男 1972a「北海道東部における古式の擦文式土器について－擦文文化とオホーツク文化の関係について補論１－」『北方文化研究』６
大井晴男 1972b「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について－擦文文化とオホーツク文化の関係について補論２－』『北方文化研究』６
大井晴男 1984「斜里町のオホーツク文化遺跡について」『知床博物館研究報告』６
大井晴男 2004「‘貼付文系オホーツク式土器群’の‘型式論’的変遷を考える－「型式論」のためのノート（３）－」『北海道考古学』40
大西秀之 1996a「トビニタイ土器分布圏における〝擦文式土器〃の製作者」『古代文化』48－５
大西秀之 1996b「トビニタイ土器分布圏の諸相」『北海道考古学』32
大西秀之 2001「〝トビニタイ文化〃なる現象の追及」『物質文化』71
大西秀之 2009『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』同成社
大場利夫 1956「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」『北方文化研究報告』16
大場利夫 1960「湖南遺跡・元町遺跡」『女満別遺跡』女満別町教育委員会
金盛典夫 1976a『ピラガ丘遺跡－第Ⅲ地点調査報告－』斜里町教育委員会
金盛典夫 1976b「トビニタイ土器群の編年的な位置について」『ピラガ丘遺跡－第Ⅲ地点調査報告－』斜里町教育委員会
金盛典夫 1981「須藤遺跡」『斜里町文化財調査報告書』１　斜里町教育委員会
金盛典夫・椙田光明 1984「オホーツク文化の終末と擦文文化の関係」『考古学ジャーナル』235
加藤博文ほか 2006「知床半島チャシコツ岬下Ｂ遺跡で確認したオホツク文化終末期のヒグマ祭祀遺構について」『北海道考古学』42
菊池徹夫 1972「トビニタイ土器群について」『常呂』東京大学文学部
菊池徹夫 1989「オホーツク文化」『よみがえる中世』４（北の中世・津軽・北海道）平凡社
清野謙次 1969「根室国根室郡和田村オンネトウの竪穴」『日本貝塚の研究』岩波書店
熊木俊朗 2000「香深井５遺跡出土「元地式」土器について」『香深井５遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
熊木俊朗 2006「オホーツク土器と擦文土器の出会い－まったく異なる系統の出会いと融合－」『公開研究発表会　異系統土器の出会い－土器研究の新しい可能性をもとめて－』「異系統土器の出会い」研究班
熊木俊朗 2010「オホーツク土器の編年と地域間交渉に関する一考察－北見市（旧常呂町）栄浦第二遺跡９号竪穴オホーツク下層遺構出土土器群の再検討－『比較考古学の新地平』同成社
熊木俊朗 2011「オホーツク土器と擦文土器の出会い」『異系統土器の出会い』（今村啓爾編）同成社
熊木俊朗 2012「香深井Ａ遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』26
熊木俊朗・榊田朋広 2014「北海道（続縄文・擦文・オホーツク以降）」『考古学ジャーナル』656
河野広道 1955「先史時代史」『斜里町史』第１編　斜里町
河野広道 1958「先史時代篇・原史時代篇」『網走市史』網走市役所
児玉作左衛門 1948『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会出版部
駒井和愛編 1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（下）』東京大学文学部
榊田朋広 2006「トビニタイ式土器における紋様構成の系統と変遷」『物質文化』81
榊田朋広 2007「異系統土器論からみたトビニタイ式土器と擦文土器の型式間交渉と動態」『物質文化』84
榊田朋広 2010「トビニタイ文化研究の現状と課題」『異貌』28
榊田朋広 2008 ～ 2013「北海道　続縄文・擦文・オホーツク文化以降」『考古学ジャーナル』572・586・601・615・628・642
榊田朋広・熊木俊朗 2014「北海道　続縄文・擦文・オホーツク文化以降」『考古学ジャーナル』656
佐藤孝雄 1991「「熊送り」の源流」『新北海道の古代』３（擦文・アイヌ文化）北海道新聞社
佐藤達夫 1964「オホーツク遺物の特色」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡　下』東京大学出版会（駒井和愛と共著）

佐藤達夫 1972「擦紋土器の変遷について」『常呂』東京大学文学部
澤井玄 1990「オホーツク文化期の遺跡の立地とその変遷」『紋別市立郷土博物館報告』３
澤井玄 1992「「トビニタイ土器群」の分布とその意義」『古代』93
澤井玄 1995「北海道内のオホーツク文化の変容について」『環オホーツク』３
澤井玄 2007「北東日本海域の古代・中世土器編年－北海道の７～13 世紀の土器編年について－」『北東アジア』髙志書院
椙田光明 1980「(ふ化場第１遺跡）試掘調査』『標津の竪穴』３　標津町教育委員会
椙田光明・椙田美枝子 1982『史跡標津遺跡群　伊茶仁カリカリウス遺跡　平成 16 年度』標津町教育委員会
瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』北海道出版企画センター
瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史』講談社
高橋理 1993「ウトロ遺跡神社山地点発掘報告」『知床博物館研究報告』14
武田修 1995『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
武田修 2005『常呂川河口遺跡（５)』常呂町教育委員会
千葉大学文学部考古学研究室編 2005 ～ 2011『北海道標津町　伊茶仁ふ化場第１遺跡　第１～７次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室編 2012a『北海道中標津町　鱒川第３遺跡　第１次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室編 2012b『北海道礼文町浜中２遺跡　第１次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室編 2013a『北海道中標津町　鱒川第３遺跡　第２次発掘調査概報　当幌川遺跡　第１次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室編 2013b『北海道礼文町浜中２遺跡　第２次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室編 2014a『北海道中標津町　当幌川遺跡　第２次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室編 2014b『北海道礼文町浜中２遺跡　第３次発掘調査概報』
塚本浩司 2010「道東部への擦文文化の拡大－トコロチャシ遺跡オホーツク文化竪穴住居址出土の土師器（擦文土器）から－」『第 11 回　北東アジア調査研究会発表要旨』
塚本浩司 2012「トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点７号竪穴出土の擦文土器（土師器）について－北海道東部の初期擦文土器－」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科
東京大学文学部考古学研究室編 1972『常呂』東京大学文学部
東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2012『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』同考古学研究室
長山明弘 2014「「カリカリウス土器群」の編年と当幌川遺跡出土土器の再検討」『古代』134
名取武光 1948a「北海道モヨロ貝塚とオホーツク式文化」『民族学研究』12－４
名取武光 1948b『モヨロ遺跡と考古学－私たちの研究－』札幌講談社
新岡武彦 1950「北海道利尻郡仙法志村政泊先史時代遺跡調査概報」『利尻郷土研究』５
西本豊弘 1989「「クマ送り」の起源について」『考古学と民族誌』(渡辺仁教授古稀記念論文集）六興出版
野村崇・平川善祥 1982「二ツ岩遺跡」『北海道開拓記念館研究報告』７
平光吾一 1929a・b「千島及び弁天島出土の土器片に就いて（１）～（３)」『人類学雑誌』44－４・５・７
福沢仁之ほか 1998「年縞堆積物を用いた白頭山－苫小牧火山灰（B-Tm）の降灰年代の推定」『汽水研究』５
藤本強 1966「オホーツク土器について」『考古学雑誌』51－４
藤本強 1972「調査の経過と問題点の摘出」『常呂』東京大学文学部
北地文化研究会編 2004『根室市トーサムポロ遺跡 R－１地点の発掘調査報告書－オホーツク文化末期の竪穴群－』
北地文化研究会編 2009『根室市弁天島遺跡 14 号竪穴の発掘調査－オホーツク文化貼付文期の大型住居址－』
松田功 2002「チャシコツ岬下Ｂ遺跡発掘調査報告書」『斜里町文化財調査報告』16　斜里町教育委員会
松田功・村本周三・田村雄介 2011「チャシコツ岬下Ｂ遺跡発掘調査報告書」『斜里町文化財調査報告』33
松田功・村本周三ほか 2011「ウトロ遺跡」『斜里町文化財調査報告』32　斜里町教育委員会
蓑島栄紀 2001『古代国家と北方社会』吉川弘文館
柳澤清一 1999a「北方編年小考－ソーメン紋土器とトビニタイ・カリカリウス土器群の位置－」『茨城県考古学協会』11
柳澤清一 1999b「北方編年研究ノート－道東「オホーツク式」の編年とその周辺－」『先史考古学研究』７
柳澤清一 2000「南千島から利尻島へ－道東編年と道北編年の対比－」『東邦考古』24
柳澤清一 2001「礼文・利尻島から知床・根室半島へ－道北・道東「オホーツク式」・トビニタイ・擦紋土器編年の対比－」『先史考古学研究』８
柳澤清一 2003「北方編年再考　その（１）－川西遺跡編年と「オホーツク式」伴出事例の謎－」『(千葉大学）人文研究』32
柳澤清一 2004「北方編年再考　その（２）－トビニタイ・「カリカリウス土器群」の細分について－」『(千葉大学）人文研究』33

柳澤清一 2005a「北方編年再考　その（３） 斜里地方における「トビニタイ土器」編年の予察―ピラガ丘・須藤遺跡からオタフク岩遺跡へ―」『(千葉大学）人文研究』34

柳澤清一 2005b「擦紋末期土器と「トビニタイ土器群Ⅱ」の成立―根室半島から知床半島・斜里方面へ―」『社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』96（北方文化の中のアイヌ）

柳澤清一 2006a「道北における北方編年の再検討　その（１）―モヨロ貝塚から内路・上泊遺跡へ―」『古代』119

柳澤清一 2006b「北方編年再考　その（４） 北海道島·南千島における北大式～擦紋Ⅳ期の広域編年―北海道島人と「オホーツク人」の接触を探る―」『(千葉大学）人文研究』35

柳澤清一 2006c『縄紋時代中・後期の編年学研究―列島における小細別編年網の構築をめざして―』（千葉大学考古学研究叢書３）

柳澤清一 2007a「北方編年再考　その(５） 二ツ岩遺跡編年の再検討―擦紋Ⅲ期における道東と道央の対比―』『(千葉大学)人文研究』36

柳澤清一 2007b「「ヒグマ祭祀遺構」出土のトビニタイ土器群Ⅱの位置」『物質文化』83

柳澤清一 2007c「北方島嶼の先史考古学―礼文島の編年秩序をめぐって―」『北海道大学総合博物館ニュース』15

柳澤清一 2008a「北方編年再考　その（６） トビニタイ土器群Ⅱの小細別編年について」『(千葉大学）人文研究』37

柳澤清一 2008b「「カリカリウス土器群」の小細別編年について」『物質文化』85

柳澤清一 2008c『北方考古学の新地平―北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し―』六一書房

柳澤清一 2008d「ソーメン紋土器の小細別案について―竪穴の骨塚・床面土器を中心として―」『北方考古学の新地平―北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し―』六一書房

柳澤清一 2008e「道北と道央から見た環オホーツク海域編年の予察―北海道とサハリン島、アムール川・松花江流域を結ぶ―」『先史考古学研究』11

柳澤清一 2009a「北方編年再考　その（７）―擦紋Ⅱ期における道央·道北、サハリン島南部の編年対比―」『(千葉大学）人文研究』38

柳澤清一 2009b「道北における北方編年の再検討　その（２）―青苗砂丘遺跡編年と北方古代史研究―」『古代』122

柳澤清一 2009c「標津町伊茶仁第１遺跡　第５次調査の概要」『第10回　北アジア調査研究報告会』

柳澤清一 2010a「道東擦紋Ⅳ期における小細別編年案の検討（予察)」『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』128（土器型式論の実践的研究）

柳澤清一 2010b「擦紋Ⅲ期における環宗谷海峡編年の検討」『比較考古学の新地平』同成社

柳澤清一 2010c「北方編年再考　その（８） 道東における新北方編年体系の検証―灰白色（Ma-b）火山灰を「鍵」層として―」『(千葉大学）人文研究』39

柳澤清一 2011a「北方編年再考　その（９） 擦紋Ⅳ期における擬縄貼付紋土器の小細別編年」『(千葉大学）人文研究』40

柳澤清一 2011b『北方考古学の新展開―火山灰・蕨手刀をめぐる編年体系の見直しと精密化―』六一書房

柳澤清一 2011c「道北編年の再検討　その（３）「「南貝塚式」から見た環宗谷海峡編年案の検討―道央から礼文島・モネロン島・サハリン島へ―」『古代』124（奥付：2010.9）

柳澤清一 2011d「道東部における竪穴住居跡の変遷とトビニタイ土器群Ⅱの成立―知床・斜理・標津を中心として―」『物質文化』91

柳澤清一 2012a「環根室海峡圏における貼付紋系土器の対比―南千島への「駆逐・移動」説をめぐって―」『千葉大学文学部考古学研究室三十周年記念　考古学論攷Ⅰ―岡本東三先生の退職とともに―』六一書房

柳澤清一 2012b「[北方編年再考　その（10)] 北見国「枝幸１・２・５号竪穴」出土土器の検討」―「南貝塚式」と「終末期」の擦紋土器をめぐって―『(千葉大学）人文研究』41

柳澤清一 2012c「旧常呂町・斜理町における新北方編年案の検証―「Ma-b」·「Km-５a」火山灰を「鍵」層として―」『古代』126（奥付，実際の刊行：2011．11→2012．5）

柳澤清一 2012d「新北方編年案とB-Tm火山灰から見た蕨手刀の副葬年代―青苗砂丘遺跡から目梨泊遺跡・モヨロ貝塚へ―」『古代』126（奥付，実際の刊行：2011．11→2012．5）

柳澤清一 2012e「ウサクマイＮ遺跡出土のソーメン紋土器の年代―土器から見た「B-Tm」火山灰の疑問点―」『古代』127（奥付，実際の刊行：202．1→2012．5）

柳澤清一 2012f「いわゆる「元地式」(「接触様式」) 編年の再検討」『古代』128（奥付，実際の刊行：2012．２→2012．５）

柳澤清一 2013a「佐藤達夫のポスト「擦紋Ⅴ」期編年の成り立ち」『岡内三眞先生古稀記念論集　技術と交流の考古学』同成社

柳澤清一 2013b「北方編年再考　その（11） いわゆる「東大編年」と山内博士の「北方編年」説の相克」『(千葉大学）人文研究』42

柳澤清一 2013c「オホーツク文化」と擦文文化の接触、同化・融合説ー展示図録「模式図」の成り立ち、その実態ー」『型式論の実践的研究Ｉ』(人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 251）
柳澤清一 2013d「道北編年再考　その（４） 礼文島浜中２遺跡（1990 年度）調査資料の編年」『古代』131
柳澤清一 2014a「香深井１（Ａ）遺跡における「オホーツク式」年代観の改訂ー異系統土器の「混在」と「共伴」の狭間からー」『(千葉大学）人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』276（型式論の実践的研究Ⅱ）
柳澤清一 2014b「北方編年再考　その（12） 擦紋Ⅱ・Ⅲ期における通説「道東」編年の検証ートコロチャシ遺跡の新「共伴」資料に触れてー」『(千葉大学）人文研究』43
柳澤清一 2014c「道北編年再考　その（５） 紋別･枝幸･稚内における「オホーツク式土器」と擦紋土器の編年ー道北･道東「地域差」編年説の見直しー」『古代』132
柳澤清一 2014d「まとめ」『北海道中標津町当幌川遺跡　第２次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室
柳澤清一 2014e「まとめ」『北海道礼文町浜中２遺跡　第３次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室
山内清男 1933「７　縄紋式以後（完)」『ドルメン』２－２
山内清男 1964「日本先史時代概説」『日本原始美術』１（縄文式土器）講談社
八幡一郎ほか 1966「西月ケ丘遺跡・弁天島遺跡」『根室の先史遺跡』東京教育大学
涌坂周一 1984「松法川北岸遺跡」『羅臼町文化財報告』８
涌坂周一 1991「オタフク岩遺跡」『羅臼町文化財報告』１４
涌坂周一 1996「相泊遺跡」『羅臼町文化財報告』１６
涌坂周一・本田克代 1980「船見町高台遺跡」『羅臼町文化財報告』４

図版出典

第１図　１～４・５・９・Ａ・13 ～ 23：駒井編（1964） ６・７：野村・平川編（1982） ８：武田（1996） 10：河野（1955）
11：松田（2002） 12：北地文化研究会編（2004）
第２A・２B・２C 図　柳澤（2001・2011d・2013a）より編成
第３図　柳澤（2008c）を改編
第４図　柳澤（1999b・2013c）を改編
第５図　１～ 17：宇田川編（1981）
第６図　１～６：宇田川編（1981） ７・10：駒井編（1964） ８・９：宇田川（1971）
第７図　１・２：駒井編（1964） ３～６：椙田・椙田（1982） ７・８：金盛（1976a） ９～ 12：金盛（1981）
第８図　１～６：撮影資料　７～ 10：駒井編（1964） 11 ～ 16：宇田川（1971） 17：宇田川編（1981）
第９図　１～３：撮影資料　４：河野（1955）
第 10 図：１～４：撮影資料